

現代日本学演習I 2022年度(5セメスタ) 東北大学文学部

質問紙調査の基礎

田中重人(東北大学文学部教授)

3年生対象:2022年度5セメスタ<金5> Google Classroom クラスコード rrakkbc

1 授業の概要

- (1) イントロダクション (4/15)
- (2) 第1講 調査課題の設定 [4/22]
- (3) 調査課題について相談 [4月末-5月上旬]
- (4) 第2講 既存調査と先行研究の探索 [5/6]
- (5) 第3講 調査対象者と調査方法 [5/13]
- (6) 第4講 調査の企画 [5/20]
- (7) 第5講 質問文と回答欄 [5/27, 6/3]
- (8) 第6講 調査票の構成 [6/10]
- (9) 第7講 調査票の回収とデータの作成 [6/17,24]
- (10) 第8講 報告書の執筆 [7/1]
- (11) 第9講 質問紙調査について学ぶことの意義 [7/8]
- (12) 調査結果発表会 [7/15,22]
- (13) 期末レポート [8/12]

講義と並行して、受講生各自の興味に基づいてそれぞれが調査をおこなう。

- 5月中旬に調査企画書を提出し、企画内容について検討
- 作成した調査票について、授業中に検討する機会を持つ(6月上旬の予定)
- 6月下旬から7月にかけて各自が調査をおこなう
- 調査結果を口頭報告する(7月中旬の予定)
- レポートにまとめて提出(8/12 締切)

調査実施は基本的に Google Forms によるが、必要に応じて他の方法を採用してよい。

2 次回までの宿題

- 教科書の第1～4章の「基礎」の部分を読んでおくこと
- Google Classroom で配布する調査票を読み、そこから検討できそうな「仮説」(理論的なものとそれを操作化したもの)を考える。最初に自分で調査票に答えてみるとよい。次回資料 <<http://tsigeto.info/2022/quesu/q220422.html>> も参照。

3 連絡先

田中重人 (東北大学文学部現代日本学研究室)

〒: 980-8576 仙台市青葉区川内 27-1 文学部棟 6F

E-mail: tanakas2013 @ tsigeto.info

Homepage: <http://tsigeto.info/welcomej.html>

教員に質問等がある場合は、Google Classroom または電子メールを通じて連絡をとること。Google Classroom が使えない場合、そのほか受講に関連して問題がある場合や特別の配慮が必要となる場合も教員に連絡すること。

第1講 調査課題の設定

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] 理論とデータの対応

1 課題

配布した調査票を見て、理論仮説と作業 (操作) 仮説との対応を考える。

- 理論仮説とそれを操作化した作業仮説の対応が分かるようにすること
- 作業仮説については、どの項目についてどのような分析結果が出ればよいかをわかるように書くこと
- 教科書のほか、何を調べてもよい。何を調べたかは、末尾に記入する。

2 理論とデータ

頭の中で考えたことを理論 (theory) という。実証研究においては、理論的なレベルで検証すべき「仮説」をはっきりさせたうえで、それに対応したデータを集めるよう調査方法等を工夫する。

仮説 (hypothesis): 研究によって真偽を決定すべき命題

理論仮説 (theoretical —): 理論的なレベルで考えた仮説

作業仮説 (working —): データによって検証可能な仮説 (操作仮説 operational — ともいう)

理論仮説を作業仮説に翻訳する作業を「操作化」(operationalization) という。

- 理論は直接検証できない
- 検証できるのは作業仮説のみ → 「もしその理論が正しいとしたら、●●の現象が観察されるはずである」
- 作業仮説が棄却された場合 → 理論仮説か操作化のどちらかがまちがっている
- 作業仮説が支持された場合、理論仮説や操作化が正しいということが主張できるわけではない
- 科学的研究における「通説」(accepted theory) は、たくさんの研究の結果、その理論仮説を否定することができず、かつ、対立する理論仮説がすべて棄却されていることをもって成立する

理論仮説と作業仮説は必ずしも2つに区分されるものではなく、抽象的なレベルの仮説から具体的なレベルの仮説にいたる連続的・多段階のものと考えたほうがよい。

また、理論仮説と作業仮説は1対1で対応しているものではない。おなじ理論仮説を検証するために複数の作業仮説がありうる。逆に、ひとつの作業仮説に複数の理論仮説が対応することもある。

いずれにせよ、理論仮説 \leftrightarrow 作業仮説の双方を往復する想像力が重要。

3 次回予定

来週 (4/29) は休講。その代り、各自の調査課題について面談をおこなう (日時は今日決定)。自分が興味のある分野について、どのようなことを調査したいか、またそのためには誰を対象にどのような質問項目が必要かを考えてくる。

第2講 既存調査と先行研究の探索

田中重人 (東北大学文学部教授)

[テーマ] 既存調査を探す

1 既存調査を特定するのに必要な情報

- 調査主体・連絡先
- 実施期間
- 名称 (対象者向け／研究者向け)
- 調査法
- 対象 (母集団・標本)
- 報告書・論文・Web サイトなど
- データ・アーカイブなどの登録情報

2 既存調査の探索

2.1 探す対象

- 先行研究
- 調査
- 質問文案・回答選択肢

2.2 探しかた

- 人に聞く
- 入門書・概説書・展望論文
- 芋づる式
- 白書、データブック
- 文献データベース
- 調査データベース、データ・アーカイブ
- 尺度集

いずれの場合も、情報の収集範囲と方法、収録基準を理解して利用すること。

調査に関する資料 (質問紙など) は、非売品の報告書に載せるのがふつう。論文や本を出版する段階では省略されることが多い。このため、自分の興味にあった質問文案を探すことは非常にむずかしい。

自分の研究分野については、代表的な調査をおさえておくこと。たとえば、

あたらしい言語表現の使用実態: 文化庁「国語に関する世論調査」

日本人の社会意識: 統計数理研究所「日本人の国民性調査」

また、一度の探索で網羅的に情報が集められるわけではないので、ふだんからアンテナを立てておくことが大切である。

2.3 先行研究 (論文・書籍) のデータベース

調査を利用した研究成果は、最終的には論文や書籍になるので、それらのデータベースから情報をたどれることが多い

- 国立国会図書館サーチ <<http://iss.ndl.go.jp>>
- CiNii Research <<https://cir.nii.ac.jp>>
- CiNii Books <<http://ci.nii.ac.jp/books/>>

報告書は図書館では書籍とおなじあつかいになっている。また、調査データを利用した論文には、調査の概要の説明があるのがふつう。

「報告書」「調査報告」などをキーワードにふくめて探すとよい。

最近は各出版社の電子ジャーナルや大学などの「機関レポジトリ」(repository)の整備が急速に進み、全文をオンラインで読んだり検索したりできる文献が増えてきている。

2.4 質問文・尺度のコレクション

特定のテーマで既存の質問文をリストした本やデータベースもある。

- 『社会調査ハンドブック』(安田・原, 1982) など
- 『心理測定尺度集』(吉田編, 2001) など
- PSDB_Mie: 三重大学心理尺度(質問項目)データベース <http://www.minamis.net/scale_search/mpsbmain.html>

2.5 調査のデータベース

調査そのものについてのデータベースはほとんど整備されていない。ただ、公開されている調査データを集めて2次利用のための便宜をはかる「データ・アーカイブ」(data archive)が最近発達しており、事実上、調査データベースとしてつかえる。

- SSJデータアーカイブ(東京大学) <<http://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp>>
- 立教大学データアーカイブ(RUDA) <<https://ruda.rikkyo.ac.jp>>

2.6 研究課題・研究者データベース

多くの調査研究は科学研究費補助金(文部科学省または日本学術振興会)の助成を受けておこなわれているので、その研究課題のデータベース中に調査の情報がかなりある。

- 科学研究費補助金データベース(国立情報学研究所) <<http://kaken.nii.ac.jp>>

また、大学などでは所属する研究者(教員・研究員・博士課程学生などをふくむ)の研究成果の情報を収集している。これを集積したデータベースが公開されており、そこから各研究者がおこなった調査の情報を得ることができる。

- 科学技術総合リンクセンター J-Global(科学技術振興機構) <<http://jglobal.jst.go.jp>>
- Researchmap(国立情報学研究所) <<http://researchmap.jp>>

2.7 インターネット検索エンジン

インターネットで公開されている情報は、サーチ・エンジンでヒットするはずである。「報告書」「調査報告」「調査票」「質問紙」などをキーワードにふくめて探すとよい。ノイズが非常に多いので必要な情報をふるいわけするにはかなりの熟練を要する。

Google Scholar <<http://scholar.google.co.jp>> は学術情報に特化した検索サービスである。非学術的な情報がカットされているのでその分ノイズがすくない。

3 本人への問い合わせ

調査主体はわかったが詳細な情報が公開されていない場合は、本人に問い合わせるとよい。調査報告書などには連絡先が通常書いてあるし、雑誌論文にも著者所属やメールアドレスなどが書いてあることが多い。また上記の J-Global などでも連絡先を調べることができる。ただし、問い合わせの前に、公開されている情報をできる限り集めてから。

4 宿題

各自の関心にしたがって先行研究あるいは調査を探す。なるべく報告書や調査票など、その調査自体の内容について詳しいことがわかる資料を探すこと。

集めた情報のうち少なくともひとつについて、つぎのことをまとめて提出

- 調査を特定するための情報
- その情報源についての書誌情報
- どういう点が自分の研究に役立ちそうか
- 調べたプロセスと、苦労した点

また、次回の授業で各自の調査企画について考えるので、どのような調査をしたいか考えておくこと。

文献

川端亮 (編)(2010)『データアーカイブ SRDQ で学ぶ社会調査の計量分析』ミネルヴァ書房。

佐藤博樹・石田浩・池田謙一 (編)(2000)『社会調査の公開データ: 2次分析への招待』東京大学出版会。

安田三郎・原純輔 (1982)『社会調査ハンドブック [第3版]』有斐閣。

吉田富二雄 (編)(2001)『心理測定尺度集II』サイエンス社。